性差に基づく科学技術イノベーションの検討小分科会
（第２５期・第４回）議事要旨

１ 日 時 ：令和３年８月６日（金） １０：００～１２：００

２ 場 所 ：オンライン

３ 出席者 ：渡辺 美代子、名越 澄子、河野 銀子、髙瀬 堅吉、野尻美保子、
伊藤 公雄、上田 修功、安田 仁奈（以上、名簿順）
（事務局） 大山 研次、森田 健嗣

４ 議事要旨
（１） 前回議論の確認
第３回分科会の議事について確認した。

（２）「科学技術とジェンダー～研究・政策・教育の現状と課題～」に関する話題提供
河野委員より、資料２－１に基づき話題提供があった。

（３）「心の性差を検証した先行研究の紹介・心の性差に関する研究の誤った引用・学習能力の性差に関する基礎的研究」に関する話題提供
高瀬委員より、資料２－２に基づき話題提供があった。

（４） 意見交換
河野委員、高瀬委員の話題提供に基づき、意見交換を行った。主な質問やコメントは下記の通りである。

- 全国学力テストに関して
・男女別データがないのは何故か。本委員会から要求する必要があるのではないか。
・学力の男女差については、統計を出すことで差別を助長することがあるため、公表しないことにも一理ある。データを公開することについて、慎重な議論が必要である。
→ 差別を助長することになりかねない都道府県の結果は公表しており、また自治体によっては学校ごとの結果を公表しているにもかかわらず、男女別の結果が公表されていないのはおかしいのではないかという意味である。
- 教育現場の男女共同参画の遅れについて
・教育学部がつくっている教育体系に課題があると思う。ジェンダーはその課題の一つ

である。

→　教育学を行う教育学部と、教員養成を行う教育学部を分けて考える必要がある。教員養成を行う教育学部、教育委員会に働きかけて変えていく必要がある。

・ジェンダーフリー教育について日教組を中心に進められた時期があった。性教育もジェンダーフリーの流れがあり、それが議論を呼んで 2002 年くらいにジェンダーを扱うことがタブーとされるようになった。

・文部科学省の立場は男女をわけないことが男女平等であるという認識だが、それは良いことなのだろうか。

→　分けないことを男女平等と考える考え方が、ジェンダー問題の解決を困難にしていると可能性がある。

・ジェンダーを強調することよりも、個々を見ていく視点を重要視することで、ジェンダーの課題は解決する可能性がある。

- 女子の理系進路選択に関して

・文系・理系の男女差を強制的に是正するような教育は、慎重に検討する必要がある。教育については、個々の適性を見る必要がある。データについても、比率だけを見るのではなく、正規化をしたうえで適切に提言を発出する必要がある。

・女性の進路選択については社会的な圧力があるために、理工系に進む女性の比率が少ないという観点がある。個々の進路希望が何によって規定されるかも考える必要がある。

・女子の理科離れについて、学校教育統計を取る必要がある。

- 環境が学習機能の性差を生むとする実験について

・ラットに与える餌を通常の実験で使用する固形餌から粉に変えるとオスの空間学習能力は変わらないがメスは変わって性差がなくなったという結果は、通常の環境はメスの飼育にはよくなかったということか。

→　そういうことである。通常の飼育環境がメスにストレスフルということだろう。

・自然環境下では、オスメスの違い差は出るのか。

→　野ネズミを使用した実験はあるが、性差を測れていない。

・もともと動物実験はオス中心に行われる。メスは月経があってデータがそろわないからといわれるが、それだけでなく環境にメスが影響されやすいということもあるのか。何かを変えたら、オスが変わったということはあるか。

→　実験動物は複数飼いが基本だが、孤飼いにするとオスの攻撃性が高まる。オスだけ行動が変わってしまう。

- 実験における性差について

・動物実験の結果をヒトに当てはめてよいのか、性差より種差が影響するのではないかが問題となる。

・解剖学的に出産後の女性の脳が委縮すると聞いたが、そういう影響はあるのか。

→　ラットとヒトでは出産の影響は異なるという見解がある。また、出産後の脱毛など、ヒトの場合はホルモンの変化が大きいだろう。

- シチズンサイエンスについて

・科学者と市民の間に入る認定心理士の活動紹介があったが、サイエンスコミュニケーターも科学者と市民を繋いでいる。サイエンスコミュニケーターの養成に心理学の要素を入れていくことは大事ではないか。

→　そうだと思う。コミュニケーションにかかわるので、心理学の要素は大事である。

・シチズンサイエンスについて前期の若手アカデミーで提言を出したとのことだが、その後、どうなっているか。

→　若手アカデミーで検討を継続している。

- セックス差とジェンダー差をめぐる研究について

・1999 年に米国科学アカデミーの出したセックス差とジェンダー差に関するレポートは参考になるだろう。そこには、「先入観にとらわれない形で脳研究や疾病における男女差の研究を徹底的にする必要がある。一方で固定的な性差をもとにする差別が行われる現象はなくす必要がある。」といった記載がある。

以上の意見交換を踏まえ、分科会として下記について共有した。

・性差に考慮した研究の重要性を理解増進することが必要である。

・差別をなくし社会的価値を増すための徹底した性差の研究をやるべきで、そのために、データをきちんととること、データの公表にあたって慎重を期すことが不可欠である。

（５）次回内容の確認

上田委員による話題提供、および今後の進め方の検討

以上